7 月のおたより

ある集まりで、初対面の方（仮にＡさんとします）が私の前に来て名刺を差し出しました。そこには大きな文字で名前とその下にカッコして「発達障害者」と書いてありました。周囲の人たちにも同じように名刺を配っていました。いかにもその特性をアピールしているかのようでしたが、それからしばらく経ったある日の「当事者研究会」※1 でのこと。そのＡさんが常連らしい振舞でそこにいて、また私に名刺を渡そうとしたので以前いただきましたよと言いました。もう私のことはすっかり忘れている様子でした。

その日はちょうどそのＡさん自身から出された研究テーマ、題して「白黒ハッキリさせてほしい」でした。彼はあるイベントに仲間を誘ったところ、あいまいな返事をされたので言い合いになったようです。相手のハッキリしない態度には我慢できないのです。「空気を読む」「臨機応変」「まあまあ」「適当に」とかいうのでは心の落ち着きを失うのです。だからそんなときどうしたらいいかみんなに教えてほしいということでした。色々意見が出たものの、結局彼を納得させられるようなアイデアはありませんでした。

こうした不確実さへの不安は、発達特性にかかわらず私たちでもよくあります。今の世の中は、AI に代表されるように何でも物事の素早い処理能力が優先され、それをできる人が一番に評価されます。そのような風潮に対して、ある著名な精神科医※3 は「答えの出ない事態に耐える力」を提唱しています。そのために必要なのは「共感」であり、共感への入り口となるのが「親切」だと結論しています。

※1 生きづらさを抱えた人々が集まり、テーマを決め、生きやすくなるための工夫（研究）などを発表し合う場。
※2 自閉症、広汎性発達障害（自閉症スペクトラム）等の場合、見通しの立たない状況では不安が強くなる、相手の表情や態度より文字や図形、物の方に関心が強い、感覚刺激への敏感さで苦労するなど様々な諸特徴がある。
※3 帚木蓬生（ははきぎほうせい）作家、精神科医。著書「ネガティブ・ケイパビリティ」（朝日新聞出版）

・日時：7 月 27 日（土）13：30～菜の花ホール（館山市北条 1735）

・**「いま期待されている精神科訪問看護の役割」**
　ご家族との「コミュニケーション」こそ回復への最良の道

講師：伊波正人（いはまさと）さん　すてっぷ訪問看護ステーションみもざ代表
1992 年生まれ、沖縄市出身、18 歳のとき縁あって南房総市の精神科病院に勤務、その間に看護師資格を目指しながら他の医療機関でも経験を積む。32 歳で独立して館山市内に事業所を立ち上げる。故郷の沖縄では幼い頃から民謡に親しみ、エイサー演奏家としても活躍していた。今回の家族会ではその腕前も披露していただく。
・質疑応答
・お楽しみコーナー…本場沖縄の民謡を歌と三線で盛り上げます

※ご参加は無料、ご予約不要、入退室も自由ですのでお気軽にお越しください。

特定非営利活動法人あわの風　千葉県館山市北条 1170-3　電話：090-2335-1338